



『福澤諭吉 家庭教育のすすめ』

(渡辺徳三郎著)

(三六八頁、二、五二〇円(税込)、慶應義塾大学出版会)

梅田望夫

(ミューズ・アソシエイツ社長・塾員)

本書『福澤諭吉 家庭教育のすすめ』は、教育者かつ福澤研究者として名高かった稀代の人格者・渡辺徳三郎(一九一六—一九八八)の「生涯の一冊」「渾身の一冊」とも言うべき名著である。本書がこのたび復刊されたことを心から喜びたい。

幼稚舎から慶應義塾に学んだ渡辺は、大学卒業後すぐ、戦時下の昭和十七年に幼稚舎教諭となり、定年退職の昭和五十六年まで四十年にわたり、慶應義塾の初等教育一筋の人生を送った。そしてその傍らライフワークとして続けた福澤諭吉研究は、福澤研究家の間でも高く評価された。幼稚舎を定年退職した後、渡辺は、自らの経験と識見のすべてを本書に注ぎ込んだ。教え子の山内慶太氏(本書の編者)に「本」というものは、一生の勉強の積み

重ねを凝集したような本は、そう何冊も書けるものではない」と語ったそうだが、本書はまさに、渡辺の「一生の勉強」が凝集された珠玉の一冊と言える。

福澤諭吉は、明治三年前後から十年前後にかけて、家庭教育、家庭生活の重要性について多く論じている。渡辺は若き日にこのことに気付き、福澤の先見性に驚くとともに、子供好きでやさしい福澤の人柄に魅了された。そしてその思想に強く共鳴し、福澤の家庭教育論を自らの福澤研究の中核に据えたのだった。同じように子供好きでやさしかった渡辺は、福澤の中に自分の姿を発見したのであらう。

本書は、福澤の著述内容を、それらが書かれた明治初期の日本の状況を踏まえ

ながら紹介しつつ、福澤思想の本質を抽出する、という構造をしている。そして文章の至るところに、渡辺の戦後教育における深い経験が織り込まれるため、読み進めるにつれて自然に、福澤思想の現代に通ずる普遍性を私たちが理解できるよう工夫されている。

たとえば明治初期と言えば、江戸時代の数百年にわたり奨励された儒教の威力が、まだ人心に深くしみついて離れなかつた頃である。儒教的封建思想が大きな力を持ち、親子間の孝徳、つまり親(特に男親)の権威が一方的に強い「孝の教え」が、あらゆる道徳の根幹に存在していた。先祖から伝えられた家を、当主たる父から子(男子、孫(男子))へと後代に伝え、家を存続することが最大の課題だった時代が長く続いたゆえ、男尊女卑が社会通念として根付いてもいた。

福澤は、伝統的な「孝の教え」を、子供の人權・人格を無視し、親の強い権力によって無理無法な行為を一方的に子供に強要するものとして批判した。そして、男子の不品行や妾を持つ風習にただただ従って泣き寝入りしなければならなかつた妻たちに深く同情した。

家庭の二大構成要素は、夫婦と親子である。

福澤は、親子間では子供の側に立ち、夫婦間では妻の側に立って、古い原理(道徳)を批判し、新しい原理を導き出そうと、明治初期に精力的に家庭教育論を書いたのだった。

福澤思想の根幹には、封建時代の儒教主義、漢学思想を日本から追放し、西洋の科学的合理主義、自由主義と独立の精神を国民の間に広く根付かせたいという志があった。そしてその中核に「独立自尊」という言葉がある。渡辺は本書で、福澤の家庭教育論を時代背景とともに詳述してから「独立自尊」へと話を展開しているのだが、その論旨の展開はみごとと言うほかなく、ぜひ一読いただきたい。

このたび本書を再読して痛感したのは、家庭教育論という入り口から福澤思想を読み解き、それを踏まえたくて「独立自尊」を考えることこそが、現代において福澤思想を理解する最もわかりやすい筋道だと、渡辺は密かに確信していたのではないか、ということである。そしてそれが、渡辺の「一生の勉強」の成果だったのではないか。本書の題名は慎重

しやかで、著者渡辺の謙虚な人柄がよくあらわれているが、私は、家庭教育に特段の興味を持たない本誌読者にも、福澤思想のテキストとして価値ある一冊となるに違いないと信じている。

以下、著者のことを渡辺先生と呼ばせていただく。

渡辺先生は、昭和十七年に幼稚舎教諭になったあと、戦時中は集団疎開を引率され、戦後の教育再開後の幼稚舎教育方針の制定にも深くかわられた。しかし昭和二十二年一月から二十四年九月まで、結核で長期の療養を余儀なくされた。その後も健康上の理由から「肺活量が少なくなっているのではとても生徒と一緒に遊んだり、はねたり出来ないから」と、クラス担任の仕事ははずれて、主事や舎長として学校行政に携わる期間も長かった。

私が幼稚舎に入学した昭和四十二年は、渡辺先生の健康が比較的すぐれていた時期にあたったため、私を含む四十八人の「昭和四十八年(卒)O組」の生徒たちは、渡辺先生に六年間通して担任していただいた「唯一のクラス」となった。

それを僥倖と呼ぶずして何と言えよう。

「真つ先に思い浮かぶ影像是、教員室前のテラスから運動場で遊ぶ私たちを象のような優しい目で見守っていて下さっていた、その温かな眼差しである。私たちと一緒に走ることはすでにできなかつたが、その温かな空気の中に包まれていく感じがいつもしたものである。」

これは本書の編者解説のなかの山内氏の文章である。彼は私の卒業と入れ替わりに幼稚舎に入學し、一年から四年生の秋まで渡辺先生のクラスに学んだ。彼が書く「象のような優しい目」「温かな眼差し」「温かな空気の中に包まれている感じ」は、渡辺先生のもので学んだ者誰もが、懐かしさとともに思い浮かべ、そして感謝の気持ちとともに振り返る、共通の原風景である。

このたび復刊された本書には、昭和六十年に小学館より出版された同名の書に加え、渡辺先生が幼稚舎在籍中に「幼稚舎新聞」「仔馬」「三田評論」などに寄稿された数々の文章が付録として収められている。これらも合わせて読むことで、慶應義塾の初等教育に脈々と流れる福澤精神の在りようを感得できるに違いない。